慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	最近のソヴエト国家理論 : A.K. Белыхの論文「国家枯死の弁証法について」を中心として
Sub Title	The contemporary Soviet theory of the state : an analysis of A.K. Belykh, "On the dialectics of the withering away of state"
Author	中澤, 精次郎 (Nakazawa, Seijirō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1964
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.37, No.6 (1964. 6) ,p.26- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19640615-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最近のソヴエト国家理論

――A. K. Белых の論文「国家枯死の弁証法について」を中心として――

中澤精次郎

はしがき

レーニンのいう「科学的社会主義の創始者達」[1]は、紡車と青銅の斧がたどつたとまつたく同様な、国家の宿命を予言した。「諸階級は、以前にその発生が不可避的であつたと同じように、不可避的に消滅する исчезнуть であろう。諸階級の消滅とともに国家も不可避的に消滅する。生産者の自由かつ平等な連合にもとづいて生産を新たに組織する社会は、全国家機関を、その時それが置かれるべきところへ移すであろう、すなわち紡車および青銅の斧とならべて、考古博物館へ」[2]という。

国家の消滅 исчезновение、すなわち枯死 отмирание をかく断定したこの理論は、その継承者であるボリシェヴィストにとつては、自己の政治的実践を合理化もしくは正当化する際に役立つた貴重なマルクスとエンゲルスからの遺産となつたが、またそれ故にこそ、彼等には、巨大な国家権力と高度に組織化された統制装置を要求するソヴエト的現実との関連におけ

る、マルクス・エンゲルスの定立した国家枯死にかんする理論的命題の「創造的な発展」という不断の努力が強要された。そしてかかる努力が、過去においてはレーニン、特にスターリンによつて払われており、また最近では、レーニンあるいはスターリンのような指導的な存在を見出し難いが、一九六一年の第二二回党大会で採択された第三次党綱領の内に集中的に表現されている。

この新綱領は、その第二部の第三章「国家建設および社会民主主義のより一層の発展の分野における党の任務」において、つぎのように記している。「歴史的発展は不可避的に国家の枯死をもたらす。国家が完全に枯死するためには、発達した共産主義社会の建設という内的条件と、国際場裏における社会主義の勝利とその確立という外的条件のつくり出されることが不可欠である」と。したがつて、かつてはもつぱら理論の領域にのみ止まつていた国家枯死の概念が、今日では政治的実践の領域にも登場するに至つたということもできるが、[3] この変化は、ソヴエト国家理論と実践との結びつきにみられる強弱あるいは疎密の歴史的な差異を示すものではない。最近の国家理論の特殊性に因るものと解すべきであろう。いいかえると、国家理論のかかる「創造的な発展」を余儀なくしたソヴエト的現実こそが改めて問われるべきではなかろうか、と考える。

スタリーン主義からの解放は、彼の国家理論を例外とするものではなかつた。一九五八年ごろから、国家にかんする彼の所説に批判的な論説が次第にその数を増し、特に第二二回党大会前後においてはその豊かな展開がみられる。[4] 一九六三年一月の「ソヴエト国家と法」誌上に記載されたA・K・ベエリフの論文[5]もまたその一つである。しかもヴエリフの論文は、その表題「国家枯死の弁証法について」からも窺知れるように、ソヴエト国家理論の基本的概念である枯死を主題としており、またその内容には興味深いものがあるので、前記した問題を、すなわちベエリフの国家理論を規定したソヴエト的現実を、彼の国家理論をレーニンならびにスターリンのそれとの関連においてさぐつてみよう。

(1) В. И. Ленин, Полное собрание сочинений, издание пятое, Москва, 1962, т. 33, с. 6.

(2) 国家の枯死を予言したこの文章は、周知のように、エンゲルスの「家族・私有財産および国家の起源」に見出されるところであるが、レーニンの「国家と革命」は、「家族・私有財産および国家の起源」のこの箇所をそのまま引用――もつともそれ以外にも豊富に引用しているので、すなわちレーニンのマルクス特にエンゲルスへの依拠を示す意味で、あえて本稿は「国家と革命」から引用（Ленин, Соч., т. 33, с. 15）してみた。

(3) Cf. S. M. Schwarz, Is the State Withering Away in the USSR? p. 161 (edited by L. Schapiro, The U.S.S.R and the Future, New York, 1963). なお、一九一九年の第八回党大会が採択した第二次党綱領には「官僚主義との断呼とした闘争を続けるロシア共産党は、官僚主義の弊害を完全に克服するためにつぎのような政策を提案する。一、ソヴェトの全代議員に国家行政上の一定の任務の達成を義務づけること。二、……三、……。これらの政策のすべての完全かつ徹底的な遂行はパリ・コンミュン実現へのより一層の前進をもたらし、また勤労者の文化的水準の上昇とともに行政機能の簡素化は国家権力の廃絶 уничтожение をみちびくであろう」（КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов цк, Москва, 1954, часть I, с. 416）と記されているが、無論、第三次党綱領にみられるように国家枯死の条件を正面から規定したものではない。

(4) この点については、L. G. Churchward の Contemporary Soviet theory of the Soviet State（《Soviet Studies》, 1961, No. 4, p. 404-419）が比較的詳細に取扱つている。

(5) А. К. Белых, О диалектике отмирания государства（《Советское государство и право》, 1963, No. I, с. 13-21）

一

レーニンもスターリンもともに国家について理論的な関心を示している。しかも彼等の国家にかんする発言がソヴェト国家理論の内容を成してきた以上、ベエリフが、国家の枯死を論ずるにあたつて彼等に言及したことは蓋し当然であるとしても、同一の姿勢をもつて彼等にのぞんでいるわけではない。レーニンからは若干の基本的な概念あるいは表現をそのまま借用しているが、スターリンにたいしてはきわめて批判的である。

周知のように、レーニンは国家を階級的な支配 господство 乃至は抑圧 угнетение の機関と規定した。一九一七年の彼の

著作「国家と革命」によると、国家は、社会の非和解的な階級的分裂を必然的にともなう経済的発展の一定の段階における所産であつて、非歴史的なあるいはまた超歴史的な存在ではない。それは階級の消滅とともに枯死することを宿命づけられている。すなわち資本主義国家とは、ブルジョアジーが資本主義的生産様式によつて保証された抑圧の下に、被搾取階級であるプロレタリアートを暴力的につなぎとめる権力装置であり、プロレタリア独裁の社会主義国家とは、国家権力を掌握したプロレタリアートが搾取階級であつたブルジョアジーを抑圧し、彼等の反抗を排除する権力装置であるが、プロレタリアートの独裁は生産手段の私的所有の破棄・社会主義の建設によつてプロレタリアートとしての自己自身の廃絶を、またそのことによつて階級の廃絶を宿命づけられているが故に、プロレタリアートの独裁は、階級社会から無階級社会に、いいかえると共産主義社会に至る移行期の過渡的な国家形態であると把握されている。したがつてベエリフが、レーニンから、「半国家」の概念をかりて社会主義国家の本質を説明し、[1] また国家はその任務を成遂げるや否や「消滅し」、「余計なものとなり、眠りこむ」といつた表現を引用して国家枯死の過程を叙述している点からすると、[2] レーニンの理論は忠実に踏襲されているかのように考えられなくもない。

しかしながら、ベエリフによると「スターリンは国家の強化を国家活動の強制的性格の増強、懲罰的機関と強制装置の強化に帰着させた。国家の強化についてのかかる一面的な理解は、社会主義体制の勝利の後における階級闘争の先鋭化というスターリンのはなはだしく誤つたテーゼと直接に結びついていた」[3] のであつて、「国家枯死の過程を共産主義的自治への国家の発展として明らかにすることは、スターリンの著作にみられるような国家の強化と国家の枯死とを対比させる根拠のないことを教示している」[4] と断定されている。成程、スターリンは、ベエリフの指摘をまつまでもなく、国家の枯死について独自の把握を要求した。「われわれは国家の枯死を主張する。しかもわれわれはそれと同時に、今日まで存在してきたあらゆる国家権力のうちで、もつとも強力な、もつとも強大な権力であるプロレタリアートの独裁の強化を主張している。国家

権力枯死のための条件を準備することを目的とする国家権力のもつとも高度な発展――これがマルクス主義的公式である。これは『矛盾している』か。しかり、『矛盾している』。しかし、この矛盾は生きた矛盾であり、マルクスの弁証法を完全に反映しているのである[5]」という。したがつて前記したベエリフの批判を素直に聞くと、彼はスターリンの理論を全面的に否定したとも考えられよう。

しかし、ベエリフがレーニンに組みしてスターリンを拒けているという結論は、彼が論文において引用あるいは参照の形式で明示しているところからのみ引出されたものであつて、彼の所論の実質的な内容にふれたものではない。スターリンが国家理論において、レーニンの延長線上に位置づけられないことは争い得ないところであるとしても、スターリンをしてかくあらしめている彼独自の認識は、必ずしも、ベエリフによつて否定しつくされてはいないからである。

そもそも、スターリンの国家理論は一九三〇年から一九三九年に至る間において形成されている。それ以前の彼はレーニンの理論を復唱していたにすぎない。すなわち一九三〇年の第一六回党大会への政治報告において、彼は、すでに指摘したように国家権力の極限的な強化こそが国家枯死の不可欠な前提であると把握して、レーニンの理論を修正し、さらに一九三三年の党中央委員会・中央統制委員会同総会の報告では、「階級の廃絶は、階級闘争の鎮静によつてではなく、その強化によつて……、国家の枯死は、国家権力の弱体化によつてではなく、その最大限の強化によつて達成される[6]」と、また一九三四年の第一七回党大会への一般報告では、「無階級社会が、いわば自然にやつてくるものでないことは明らかである。われわれはすべての勤労者の努力により、すなわちプロレタリア独裁の機関の強化によつて、階級闘争の展開によつて、階級の廃絶によつて、資本主義的階級の残存物の一掃によつて、内外の敵との戦闘のなかで、それを戦いとり、建設しとげなければならない[7]」と繰返えし強調している。しかも彼は、一九三六年の第八回臨時ソヴエト大会では、ソ連における搾取階級の絶滅と社会主義の完全な勝利、したがつて共産主義の第一段階の実現と社会民主主義的制度の確立を確認し[8]、また一九三九

年の第一八回党大会の報告では、敵対的な階級の絶滅と人間による人間の搾取の根絶をかさねて承認しているにもかかわらず、[9]侵略的な資本主義諸国による囲繞という対外的条件を挙げて、[10]国家の枯死を遥かな将来においやり、改めて国家権力の強化特に国家の防衛的機能の強化を要求するとともに、社会主義国家に固有な諸他の機能を指摘する。すなわち「一〇月革命以来、わが社会主義国家は、その発展において二つの主要な段階を経過した。第一の段階。これは一〇月革命から搾取階級の絶滅に至るまでの時期であつた。‥ 第二の段階。これは都市および農村の資本主義的分子の絶滅から、社会主義的経済制度の完全な勝利と新憲法の採用に至るまでの時期であつた。この時期の基本的任務は、全国にわたつて社会主義経済を組織すること、資本主義的要素の最後の残滓を絶滅すること、文化革命を組織すること、国防のために完全に現代的な軍隊を組織することであつた。これに応じてわが社会主義国家の機能も変化した。国内における軍事的圧迫の機能は消滅し、死滅した。なんとならば搾取は根絶され、最早搾取者はなく、抑圧すべきなにものもないからである。抑圧の機能のかわりに、国家は、人民の財産をぬすもうとする者と着服する者から、社会主義的財産を保護する機能をもつようになつた。外部からの攻撃にたいして国家を軍事的に防衛する機能は完全に保存され……た……。国家機関の経済的・組織的活動と文化的・教育的活動の機能も保有され、かつ完全に発展することができた。いまや、国内におけるわが国の基本的任務は、平和な、経済的・組織的活動と文化的・教育的活動ということである」[11]と。

要するに、スターリンは、当初においては階級対立の激化を理由としてプロレタリア独裁権力の強化を、また国内における搾取階級の絶滅を承認したその後においては、プロレタリア独裁とはいえぬために社会主義国家と表現しているが、対外的な防衛を理由として国家権力のより一層の強化を合理化するとともに、社会主義国家の本質的機能を、全人民的財産保護のための強制的機能と経済的・組織的ならびに文化的・教育的な機能に求めて、国家の存続を積極的に肯定した。レーニンのいう共産主義の第一段階である社会主義国家は、階級的支配（独裁）もしくは抑圧とはまつたく無縁な、むしろ原理的に

は階級的支配とは対立的な任務と機能を要求された国家として登場するに至つたわけである。すなわちスターリンの国家理論においては、レーニンの国家概念は事実上否定されているといわなければならない。

しかるに、ベエリフは、スターリンの名を挙げてその所説を批判し、また社会主義の発展にともなうある種の国家機関と機能の消滅を承認するが、社会主義国家防衛の機能と徒食者・不正利得者・常習的犯罪者などの不法行為にたいする国家的強制 государственное принуждение の機能の強化を決して否定してはいない。[12] たとえば、「……枯死は突然には生じない、漸進的に、共産主義のある発展段階において生ずる。もし、われわれが直ちに国家の統治機関を弱体化し、今日では主として外敵の陰謀からの防衛機関である強制機関を廃止するならば、それは最も粗雑な誤りであり、左翼的飛躍である」[13]と、あるいはまた、「勝利した社会主義の下では説得と強制とが同等であるとしても、搾取階級がすでに消滅したときには、またそこにおいては、説得の領域は強制の領域の縮少を犠牲として増大しよう」[14]と指摘した後に、「わが国家権力はそのあらゆる活動において説得を大規模に利用する。しかしながら、このことからは、必要な際にも強制を利用しないという結論は出ない」[15]と改めて強調している。また彼によると、枯死の過程を国家の弱体化の過程と同一視する見解は修正主義であるとも攻撃されている。[16] それ故に、搾取階級の絶滅と社会主義の建設すなわちプロレタリア独裁の歴史的使命の完遂後における社会主義国家の存続を積極的に基礎づけるにあたつて、スターリンが挙げた諸条件はすべて承認されたことになろう。階級的支配を本質的な機能としない国家の存在を肯定し、レーニンの階級国家概念を事実上否定している点において、ベエリフはスターリンと軌を一にしており、彼がレーニンの「国家と革命」から幾つかの基本的な概念あるいは表現を借用しながらも、「国家と革命」において繰返えし記述されているレーニンの国家概念そのものを遂に紹介してないことは、単なる偶然とは考えられないのである。もつとも、国家の概念については彼のレーニンにたいする立場はスターリンのそれと同一であつたが、国家の枯死についてはスターリンのいう「マルクス主義的公式」を批判して、自説を展開している。

(1) A. K. Белых, О диалектикие отмираня государства. 《Советское государство и право》, 1963, No. 1, c. 14.
(2) Там же, с. 16.
(3) Там же, с. 14.
(4) Там же, с. 14.
(5) И. В. Сталин, Сочинения. Москва, 1955, т. 12. с. 369-370.
(6) Там же, т. 13, с. 211.
(7) Там же, т. 13, с. 350.
(8) 第八回臨時ソヴェト大会における現行ソ連邦憲法の草案についての報告で、「わがソヴェト社会は基本的にはすでに社会主義の実現に成功し、社会主義体制を創設した、すなわち、言葉をかえていえばマルクス主義者によつて共産主義の第一段階、もしくはより低い段階と呼ばれているものを実現するに至つた。すなわちわが国においては、すでに共産主義の第一段階、社会主義が基本的には実現されているのである」(J. Stalin, Problems of Leninism, 1940, Moscow, p. 569) と、あるいはまた「敵対的階級の存在する資本主義諸国の民主主義は、結局のところ、強者のための民主主義、少数有産者のための民主主義である。ソ連の民主主義は、反対に、勤労者のための民主主義、すなわち万民のための民主主義である。・ それ故にソ連の憲法は世界で唯一の、徹底した民主主義的な憲法であると考えられる」(Ibid., p. 579) と評価されている。
(9) Cf. Stalin, ibid., p. 656.
(10) 「 資本主義による囲繞が一掃されないかぎり、外からの軍事的攻撃の危険が解消されないかぎり、国家は存続する。・ …もし、資本主義による囲繞が一掃されるならば、資本主義による囲繞が社会主義の囲繞によつて代るならば、国家は存続せずして、枯死 atrophy するであろう」(Stalin, ibid., p. 662) という。
(11) Stalin, ibid., p. 661-662.
(12) Белых, указ. соч., с. 17.
(13) Там же, с. 17.
(14) Там же, с. 16.
(15) Там же, с. 17.
(16) Там же, с. 18.

二

マルクス主義的な国家理論のいう枯死とは、二様の意味をもつ。すなわちその一つは「過程としての枯死」であり、他の一つは「状態もしくは結果としての枯死」であつて、この区別を曖昧にして国家枯死の問題を正しく究明することは不可能であるというベエリフの主張を入れて、彼の理論を紹介してみよう。(1)

そもそも社会主義国家を「半国家」と規定し得る根拠は、それが国家一般にみられる機関を保有し機能を遂行しているにもかかわらず、これらの機関と機能がいずれも「特殊性と発展の展望をもつており、またそれらの本質からする具体的な分析的究明を要求している」(2)ところにある。すなわち社会主義国家はその成立の当初から勤労者のための民主主義を意味し、多数者による少数者の支配を確立した。それは人民の上に立つ機関ではなくして、人民の利益を表現する機関であり、社会主義的ならびに共産主義的な人間関係の創造を基本的使命とし、組織的・経済的ならびに文化的・教育的な機能を主要な機能とするが、同時にまた職業的官吏を必要とし、裁判所警察軍隊を具備し、国家・法的強制 государственно-правовое принуждение と軍事的防衛の機能を遂行する。就中、社会主義の建設期にあつては、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの国家・政治的な階級的支配すなわち独裁を実現した。しかし、かかる階級的支配という国家の本質的機能は、搾取階級の根絶と社会主義の完全な勝利とともに消滅し、また国家・法的強制の機能も、決して一挙にではないが、縮少する。したがつて「過程としての枯死」の始発は、これを原理的にみれば、資本主義から社会主義への移行の段階に求められようが、この段階では枯死の不可欠な前提が実現されるにすぎず、枯死の過程そのものは未だ具体的には現われていないわけであるから、「それは社会主義の決定的な勝利とともに、プロレタリアートの独裁国家の、社会主義社会の勤労者の全人民的組織への完全な転化とともにのみはじまる」(3)と理解すべきであり、共産主義に際して完全に消滅する機関と機能すなわち国家の

本質的特徴についてのみ、「枯死」の概念を適用することは、誤りではないにしても、「枯死」を狭義に解した場合にかぎり許されることであつて、レーニンが主として語つているところは、このような意味の「枯死」についてである。[4] しからば広義の「枯死」、つまり狭義の「枯死」をもつてしては把握しつくせない、より豊かな内容をもつた枯死の過程はいかに理解されるべきか。きわめて一般的形式的にいえば、国家枯死の過程には不可分な二つの側面が認められる。すなわち一方では、社会主義国家のある種の形態・機関・機能が政治的性格を喪失しつつ発展・強化・完成し、いいかえると変形しつつ存続し、他方では、国家固有の特性の漸進的な枯死すなわち国家的強制の機関と機能の必要性の消滅が進行する。したがつて、広義の「枯死」の過程とは、国家の非本質的な活動領域の全面的な拡大・発展と、国家の本質的な活動領域の縮小・消滅とからなる弁証法的な過程として理解されねばならない。[5] もつともこの過程は、社会主義国家が国家としてあるかぎり、現象的には、国家の非本質的な機関と機能の役割の拡大と完成・社会主義国家の共産主義的自治への発展が主要な過程として現われる。なんとならばかかる自治は不可避的に消滅する機関と機能からではなくして、政治的性格を喪失しつつ存続する機関と機能からのみ生ずるであろうからである。いいかえると「状態としての枯死」したがつて共産主義社会は、国家の本質的な機関と機能・国家的強制権力の全面的な強化の極限としてではなく、「きわめて緩慢な」[6]、長期にわたる、前述したような弁証法的な発展の帰結としてのみ現われるであろうからである。

「状態としての枯死」の下においては、国家・法的強制を可能とする機関とその構成員は完全にその姿を消すが、国家の枯死した状態すなわち共産主義社会が高度に組織化された社会である以上、統制の必要性したがつて権力の存在を否定することは許されないはずである。要は、統制が強制を、権力が政治的性格をともなつてないことであり、したがつてこの段階の自治は、共産主義建設の段階における社会主義的自治と区別して、共産主義的自治と規定されねばならない。それ故に、「状態としての枯死」への過程とは社会主義的自治の共産主義的自治への発展の過程であると、さらにいいかえれば社会主

義国家の強化の過程であると把握することができる。なんとならば社会主義国家の強化とは国家と人民との結びつきの強化を、国家と社会のあらゆる問題の処理への勤労者大衆の自覚的かつ積極的な参与の拡大を意味しているからであつて、「過程としての枯死」要するに国家の枯死とは、社会民主主義の発展と本質的には同一である。しからば共産主義の全面的建設の段階にある今日のソ連において、かかる社会民主主義の発展は、いかに展開されつつあるか。具体的にいえば、それは、民主的な国家機関であると同時に大衆的な社会組織である諸ソヴエトの発展、諸社会組織と勤労者の創造的統一によるソヴエト国家活動の底礎、諸社会組織への国家機能の譲渡のからみ合いとして現われている。[7] もつとも、ソ連における共産主義社会の実現したがつてまた国家の完全な枯死のためには、国際場裏における社会主義の勝利とその確立という外的条件の成立が不可欠ではあるが、[8]「国家の完全な枯死は、国家の社会主義的自治と社会の社会主義的自治との完全な融合と発展の結果として、共産主義的自治への社会主義的自治への全力的な完成と変形の結果として現われるであろう」[9] ことは疑い得ないのであると。

以上が、ベエリフの論文「国家枯死の弁証法について」の要旨であるが、前記したその紹介は必ずしも論文の構成によつてはいない。論文には党綱領は無論のこと、フルシチョフ、スースロフなどの所説が頻繁に引用されており、[10] そのこともあつてか隔靴掻痒の憾がなくもないが、社会主義から共産主義への移行という発展の図式は指摘するまでもなく、枯死を過程としての枯死と状態としての枯死とにわかつ二様の把握も、レーニンからスターリンへ、さらにはベエリフへと一貫して受継がれていることは明白である。また、状態としての枯死が一挙に実現されるものではないこと、過程としての枯死が比較的長期にわたつて展開されるのであろうことをいずれもが認めているものの、過程としての枯死の始発、その展開の内容、および状態としての枯死の態様については見解の対立がみられることも疑う余地のないところである。

まず過程としての枯死の始発についていえば、スターリンもベエリフもこれを搾取階級の絶滅・社会主義の決定的な勝利

に求める。特にベエリフにおいては、この点の曖昧なスターリンとは異つて、プロレタリア独裁の社会主義国家の全人民的な社会主義国家への転化とともにはじまると明確に示されている。しかし、レーニンは必ずしも判然と語つてはいないが、プロレタリア独裁の実現とともに漸進的な枯死の過程がはじまるとする見解を否定してはいない。たとえば「資本主義から共産主義への移行に際しては、抑圧 подавление はまだ必要であるが、しかし、それはすでに多数者である被抑圧者による少数者である搾取者の抑圧である。抑圧のための特殊な装置、特殊な機関である『国家』はまだ必要であるが、しかし、これはすでに過渡的な国家であり、すでに本来の意味における国家ではない。なんとならば、多数者である昨日までの賃金奴隷が少数者である搾取者を抑圧することは、奴隷、農奴、賃金労働者の反抗を抑圧することよりも、比較すると、はるかに簡単なまた自然なことであるので、それははるかに少ない流血ですむであろうし、人類にとつてはるかに安価な犠牲ですむであろうからである。……人民は、きわめて簡単な『機関』によつて、のみならずほとんど『機関』がなくとも、特殊な装置がなくとも、武装した大衆の単純な組織（先回りしていえば、労働者・兵士代表ソヴェトのようなもの）によつても、搾取者を抑圧することができる」[11]と、レーニンはいう。すなわち、国家は階級的支配の機関であると規定するかぎり、枯死の始発は、階級そのものの廃絶を宿命づけたプロレタリア独裁の成立にこそ求めねばならないはずであり、レーニンの階級国家概念に承服しないスターリンとベエリフが枯死の始発についてレーニンと見解を異にしていることはむしろ当然であろう。しかも枯死[12]の始発とその内容とは論理的に不可分である故、枯死の内容についてのレーニンの所説をまず取上げてみよう。

国家は階級的抑圧を本質的機能とし、その実態は「武装した人間の特殊な部隊」[13]から成り、そしてこの「武装した人間の特殊な部隊」は、プロレタリア社会主義革命によつて「住民の自主的に行動する武装組織」[14]におきかえられる。いいかえるとプロレタリア独裁による搾取階級の根絶とともに、階級的抑圧の必要性もまた当然に消失する。もつとも「われわれは空想家ではないから、個々人が不法行為をおかす可能性と不可避性を否定しないし、同様にまたこのような不法行為を抑圧する

必要性を少しも否定しはしない」[15]が、資本主義的な搾取から解放された人間は「強迫 насилие がなくとも、強制 принуждение がなくとも、服従がなくとも、国家とよばれる特殊な強制装置がなくとも」[16]、共同生活の基本的な規律をまもる習慣を自ら身につけるであろうし、したがつて「不法行為は不可避的に『枯死』しはじめるであろう」[17]から、強制もまた必然的に枯死するであろうと、レーニンは説いている。したがつてレーニンが、プロレタリア独裁に、強力かつ巨大な抑圧機関もしくは強制装置を要求していないこと、国家の完全な枯死に至るまでのいわば過渡的な段階における、階級的抑圧を本質的な機能としない国家、国家枯死のための主体的な役割を課せられた社会主義国家の存在を予想しないことは明らかであろう。国家の枯死は、あくまでも社会主義社会の「自然必然性」において理解されていたのであつて、ここに、レーニンの国家理論の特徴が見出されねばならない。しかるに、スターリンにおいては搾取階級の絶滅・プロレタリア独裁の終了後に、侵略にたいする防衛、不法行為にたいする強制、共産主義建設のための経済的・組織的ならびに文化的・教育的な機能を不可欠とした国家の存在が要求されており、この点は、既述したようにベエリフにあつてもまつたく同様である。無論、スターリンもベエリフも国家枯死の客観的必然性を否定しているわけでは決してない。社会主義の共産主義への移行の歴史的必然性は繰返えし唱えられているところである。しかし、プロレタリア革命によつて生れた社会主義社会の自然必然性においてのみ枯死を理解したレーニンにたいして、スターリンとベエリフは、階級的抑圧をもはやまつたく必要としなくなつた社会主義国家の実践的必然性との関連において枯死を理解した。したがつてレーニンの国家理論を客観主義的とよぶならば、スターリンの、そしてまたベエリフのそれは主観主義的であるということができよう。

しかしながらベエリフは、社会主義国家の強制機関と強制機能のより一層の強化と拡大を主張し、その限界的な発展の帰結として国家の枯死を把えたスターリンの所説は誤りであると批判して、枯死への連続性――無論レーニンとは異つた意味での連続性――を強調し、スターリンが言及していない状態としての枯死すなわち共産主義社会の態様について積極的に語

つているが、レーニンによると「人にたいする統治にかわつて、物の管理と生産過程の指導とがあらわれる」[18]とされた共産主義社会は、ベエリフにおいては、政治的性格をまつたく喪失した権力と統制の存在する高度に組織化された社会として画き出されている。したがつて、レーニンの予定した無政府主義的な色彩[19]の強い共産主義社会は、ベエリフにおいては著しく変容されているわけであり、また政治的性格を否定するとはいえ、ともかくも、権力と統制の必要性を共産主義社会に持込んでいる点に注目していえば、ベエリフの国家理論は、レーニンのそれよりも、政治社会一般の現実に幾分か近づいているということもできよう。もつとも、すでに指摘したように枯死の主観主義的な把握自体にかぎつていえば、スターリンの国家理論は、レーニンのそれよりも、前述したような意味においてより現実的であつたといえなくもないはずである。しかしスターリンの主観主義的国家理論においては、階級国家概念の必然的な所産であるレーニンの無政府主義的な共産主義社会のイメージの修正は必要とされなかつたし、また修正は許されなかつたが、ベエリフの主観主義的国家理論においては、その決定的な修正が不可避的に要求されていることを忘れてはならない。

(1) Белых, указ. соч., с. 21.
(2) Там же, с. 15.
(3) Там же, с. 21.
(4) Там же, с. 16.
(5) Там же, с. 15.
(6) Там же, с. 19.
(7) Там же, с. 19.
(8) Там же, с. 21.
(9) Там же, с. 20.
(10) たとえば、枯死の漸進性を忘れて統治機関の弱体化と強制機関の廃止を口にすることは重大な誤りであるという記述（第一章註13参照）は

フルシチョフからの、あるいはまた、勝利した社会主義の下においては説得を尊重するとはいえこのことは強制権力の行使を妨げるものではないという断定（第一章註15参照）はスースロフからの引用である。特に第三次党綱領には全面的に依拠しており、したがつて論文は党綱領の解説的な性格が強く、論説としてはなはだ物足りないが、その反面、ソ連における最近の国家理論的研究の平均的内容を備えているとみることもできる。

(11) Ленин, Соч., т. 33, с. 90–91.

(12) ベェリフがレーニンの国家概念に忠実でないことは、彼の「全人民的国家」という概念によつてよく示されていよう。もつともこの概念は彼の独創ではないし――第三次党綱領にもみられる――、また一個の概念として厳密に規定されてもいないが、レーニンにおいてはかかる表現自体が許されなかつたはずである（См. например, Ленин, Соч., т. 33, с. 17, 19–20）。

(13) Ленин, Соч, т. 33, с. 9.

(14) Там же, т. 33, с. 10.

(15) Там же, т. 33, с. 91.

(16) Там же, т. 33, с. 89.

(17) Там же, т. 33, с. 91.

(18) Там же, т. 33, с. 17.

(19) レーニンは、たとえばつぎのようにいう。「マルクスは――無政府主義者との闘争の真の意味を歪曲されないために――、プロレタリアートにとつて必要な国家の『革命的・過渡的な形態』を意識的に強調している。プロレタリアートには国家は一時的に必要であるにすぎない。われわれは目標としての国家の枯死の問題については、決して、無政府主義者と意見を異にしてはいない」（Ленин, Соч., т. 33, с. 60）と。

むすび

周知のように、レーニンが「国家と革命」を発表したのは一〇月革命の直前であり、社会主義革命の遂行、プロレタリア独裁の実現こそが彼の当面した実践的課題であつた。したがつてかかる政治的実践に暴力性と緊急不可避性を要求すればするほど、これを合理化する理論の存在がますます強く要求され、国家の階級性を指摘したマルクスとエンゲルスの国家理論

が率直に継承されることとなつた。その結果、この理論の定立した共産主義社会のイメージは、高度の理想性の故にレーニンの革命的実践の正当化を容易にし、また国家枯死とプロレタリア革命との無媒介的な結合[1]、社会主義社会の自然必然性との関連における枯死の把握、すなわちマルクスとエンゲルスに依拠したレーニンの客観主義的な国家理論はプロレタリア革命の合目的性をいかんなく保証した。レーニンの国家理論は、ダニエルスの指摘しているように[2]、プロレタリア革命を当面の課題としたボリシェヴィストの国家理論であつたといわねばならない[3]。したがつて革命後の、巨大な国家権力と高度に組織化された強制装置を必要としたソヴエト的現実の合理化と、またこの現実に対応してより一層の権力の集中と統制の強化を要求する実践の正当化はレーニンの国家理論をもつてしてはもはや明らかに不可能であつた。「理論の創造的発展」という表現の下に理論の連続性を装いつつ、その実、国家枯死の客観的必然性は実践的必然性へと変質させられねばならなかつたわけであり、またこの役割はスターリンによつて果された。すなわちベエリフの国家理論が、本論で明らかにしたように原理的にはレーニンではなくしてスターリンの理論を踏襲していることは、スターリンに課せられたソヴエト的現実が今日なお強く存続していることを物語つている。しかし巨大な国家権力と高度に組織化された強制装置の必要と、権力の集中と統制の強化の要求は、ベエリフの直面したソヴエト的現実の一つの側面であつて、他の側面が見逃されてはならないことは、彼によると国家枯死の過程は、国家の本質的機能の縮小・衰退と国家の非本質的な機能の拡大・強化とから成る弁証法的な過程であると把握され、国家の本質的機能の強化・拡大を一面的に要求したスターリンの国家理論が批判されていることからして明らかであろう。もつとも、ベエリフの説くように、ソヴエトの民主化、国政への大衆参与の拡大、労働組合等の社会組織への国家機能の移譲が国家の非本質的機能の強化・拡大を意味し、またそのことが国家の本質的機能の縮小・衰退を意味するとは考えられない[4]。しかし認識の妥当性と論理の整合性はスターリンのみならず[5]、ベエリフにもまた期待できないが、ともかくも彼がスターリンの国家理論の核心的な一面を批判し、あえて社会民主主義の発展を強調し、社会主義的自

治の拡大を要求している点に注目するならば、彼の当面したソヴェト的現実の他の面として、巨大な国家権力と高度に組織化された強制装置の必要に乗じて、より一層の権力の集中を要求した支配にたいするその対象からの抵抗の存在を指摘することができよう。要するに、ベエリフの国家理論はスターリン的国家統治の原則を基本的には承認しつつも、それにたいする抵抗への譲歩を正当化し、譲歩の限度を合理化する理論として登場したとみることができる。しからば、論文「国家枯死の弁証法について」に現われたベエリフの国家理論は、いわばフルシチョフ的国家統治の理論としてのみ意義を与えられるべきものであるか。

国家は階級支配の機関であり、また共産党はプロレタリア階級の前衛であるというレーニンの規定からすると、「階級が消滅するとともに、プロレタリアートの独裁が枯死するとともに、党も枯死する」[6]というスターリンの一九二四年の発言は、むしろ当然の帰結であつたわけであるが、その後党の枯死は禁句となつて今日に至つている。ベエリフの論文においても例外ではない。しかも党の枯死を禁句としたばかりでなく、スターリンは国家の枯死との関連においての党について一言も語つていないし、またレーニンも同様であつたが、ベエリフはこの点についてつぎのように述べている。「社会主義国家によるその歴史的使命遂行の決定的条件――共産主義の完全かつ最終的な勝利の保証――は共産党による指導である。社会の政治的機関のあらゆる組織における共産党の指導的役割の不断の増大は、共産主義的自治形成の客観的法則である」[7]と。すなわちレーニンの「国家と革命」が党についてほとんどふれてない事実は、彼の国家理論の歴史的限界を、いいかえるとプロレタリアートの前衛であるとされた党の役割が問題たり得ない自明の理であつたことを示しているわけであるが、スターリンが党の枯死を禁句にし、また国家の枯死との関連における党の役割について一言もふれてない事実は、レーニンとは異つて、党の役割を問題とし得なかつたことを示しているといわねばならない。スターリンにおいては搾取階級の絶滅が確認され、社会主義の勝利とその確立が承認されていたからであり、プロレタリア独裁後における党の指導性を基礎づける理

論は、国家理論のうちに完全に埋没したままに、いいかえると未形成のままに残されていたのである。論文「国家枯死の弁証法について」を結ぶ一文として掲げられている前記したベェリフの発言は、かかる要請にたいする自覚を物語つていよう。[8] すなわち、彼のいう社会民主主義の全面的な発展、社会主義的自治の共産主義的自治への発展は、なお問われるべき多くの問題を残しながらも、[9] 党の指導性を基礎づける理論の基本的な方向・前提を明らかにしており、かかる意味において彼の国家理論は、国家統治の理論であるとともに、党指導の理論として認められるべき意義をひそませている。

(1) レーニンは、たとえば、「国家が実際に全社会の代表者としてあらわれる最初の行為——社会の名において生産手段を掌握すること——は、同時に国家が国家として行う最後の自主的な行為である」——エンゲルスの「反デューリング論」からの引用——(Ленин, Соч., т. 33, с. 17) と、あるいはまた「ひとたび人民の多数者自身が、自分の抑圧者を抑圧することになると、抑圧のための『特殊な力』は、もはや必要ではなくなる！ この意味で、国家は枯死しはじめる」(Там же, т. 33, с. 42) とも述べており、国家枯死の経済的基礎を論ずるにあたつて、彼が「資本家がもはや存在しない、階級がもはや存在しない、それ故にいかなる階級を抑圧することもできないというかぎりでは、国家は枯死する。しかし、国家は完全に枯死したのではない。なんとならば、事実上の不平等を是認する『ブルジョア的権利』が依然として保護されているからである。国家が完全に枯死するためには、完全な共産主義が必要である」(Там же, т. 33, с. 95) と指摘しているとはいえ、このことによつて、社会主義の勝利後における国家の存在を肯定したスターリンあるいはまたベェリフとレーニンとを同一視することはできない。

(2) Cf. R. V. Daniels, The 'Withering away of the State' in Theory and Practice, p. 113 (edited by A. Inkeles, K. Geiger, Soviet Society—A Book of Readings,— 1961).

(3) 革命の成立後、狭隘な階級国家概念によつて支えられた国家理論からは説明できない事態に直面して、レーニンは従来の見解を幾分か修正するような動きを示している (См., например, Ленин, Соч., т. 36, с. 350-352)

(4) Cf. S. M. Schwarz, Is the State Withering Away in the USSR ? p. 163 (edited by L. Schapiro, The U.S.S.R. and the Future, New York, 1963).

(5) スターリンの国家理論が長期にわたつて権威ある理論たり得たのは、その理論的妥当性でも論理的整合性でもなくして、この理論の社会的な役割乃至は機能による。Cf. B. Moore, Soviet Politics—the Dilemma of Power—, 1951, Massachusetts, p. 224.

(6) Сталин, Соч., т. 6, с. 181.

(7) Белых, указ. соч., с. 21.

（8）ソ連における最近の国家理論関係の論説は、ほとんど例外なく、共産主義の全面的建設の段階における党の指導的役割の拡大を強調している。たとえば、共産主義への移行に際して「ソヴェト人民の戦闘的・証明ずみの前衛、ソヴェト国家の指導的・嚮導的な力、社会および国家の勤労者の全組織の指導的核心である共産党の役割と意義は、ますます増大する」（П. С. Ромашкин, Вопросы развития государства и права в проекте Программы КПСС,《Советское государство и право》, 1961, No. 10, с. 39）。

（9）Cf. for ex. S. Schwarz, op. cit., p. 175.